

# 第41回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。  
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

## ■中学校1年生の部 最優秀賞

小さな千羽鶴に込められた思い  
弟子屈中学校 浜崎 心寧さん



皆さんは、千羽鶴を一人で折ったことはありますか。大抵の人が「ない」と応えると思います。

私は、一羽折るだけでも難しいのに、千羽折るなんてもっと大変なことですよ。私も折ったことがあります。  
この本は、一九四五年八月六日に落とされた原爆によって被爆し、闘病生活を送っていた佐々木禎子さんが、早く元気になろうという思いから千羽鶴を折っていきます。その鶴の大きさは、わずか1・2センチメートル。このことを伝えようと、日本はもちろん海外の人にも伝えるために、親戚やボランティアの方、海外の方々が、全国に発信していく本です。

私がこの本を読もうと思った理由は、広島の話はよく聞くけれども、もっと知りたいと思ったからです。また、表紙の小さな小さな折り鶴の写真がとても気になったからです。

禎子さんは二歳の時に被爆し、白血病のため十二歳という若さで亡くなりました。私も十二歳ですが、今、この年で死んでしまうなんて考えられません。禎子

さんは、どんなに辛くても決して弱音をはず、病氣と戦い続けました。とても、我慢強いと思いました。

禎子さんのお兄さんとその息子さんは、禎子さんの折った千羽鶴のうち五羽を、ユーラシア大陸、アフリカ大陸、北アメリカ大陸、南アメリカ大陸、オーストラリア大陸にそれぞれ送りました。お父さんも息子さんも、全国の人々にもっと禎子さんのことを知ってもらうためにいろいろな活動をしたそうです。禎子さんのために、一生懸命活動しているところが、とても家族思いだと思います。私も家族のために、少しずつ出来ることからも何かやらなくてはと思いました。

そんな禎子さんのことを歌詞にした歌があります。「NORR〜折り〜」という歌です。私はこの歌が気に入り、聞いてみました。この歌の中にこんな歌詞があります。

「めへりめへり行く季節をこえて  
今でも今でも折ってる  
二度と二度と辛い思いは  
誰にもしてほしくない」

この歌詞には、二度と戦争をしてほしくないという強い思いが込められていると思います。この前、家族でお出かけしたときに、「戦争させるな」「戦争反対」と書かれたボードを持って叫んでいる人がいました。皆、世界の平和を祈っています。そして、もう一つ心にグツとくる

歌詞がありました。

「折り鶴を一羽折るたび辛さがこみ上げてきました。  
だけど千羽に届けば暖かい家に帰れる願いは必ずかなうと信じて折り続けました」

この歌詞には、病気が重くても辛かったけど、早く元気になりたいという禎子さんの気持ちが込められていると思います。皆さんも、この歌を聞いてみてください。何か禎子さんの思いが見えるはずです。そして、平和な世の中を祈り続けましょう。

書名『奇跡はつばさに乗って』

源 和子 著

(寸評)

浜崎さんの深い思いと優しさが伝わってくるすばらしい感想文です。  
筆者の思いに自分の思いを重ね合わせ、物事の本質を読み取るうとしている姿が感じ取れます。

人類が自ら起こしたかつての戦争、そして今現在起こっている数々の紛争、その状況の中で、常に犠牲になるのは子どもたちと高齢者たちです。心寧さんのように人々を思いやる優しさを持ち、平和を望む人たちがどんどん声を上げていくことが大切です。

周囲の人にはいっばい伝えていってください。  
を深く考察できています。「人と人がうまく関係を作るためには感情を言葉で伝え合うことが必要。しかし、動物にはその言葉は通じない。だから動物との関係はうまくいかないのか。」読む人にもんな問題を投げかける書き方ができています。考えを伝えるための構成が上手です。今後ますます本を読んで、自分のものの見方、考え方をどんどん広げていってください。

## ■中学校2年生の部 最優秀賞

人と動物、人と人の生き方  
川湯中学校 池上 知乃新君



ぼくはこの本を読んで数えきれないほど、頭が痺れ、心を打たれ、感動しました。

ぼくは小学生の頃、このアニメを見ました。その時は、戦っている姿がカッコいいなど、とても単純に思いました。しかし、中学生になり本を読んでみると、作者が伝えたいことはそんな単純なことではないと確信しました。

きっと作者は人と動物、人と人の生き方を伝えたいのだと思いました。  
この本の主人公は、たくさんの体験をしていくことで、動物を「飼う」という行為に嫌悪感を抱いていきます。本来、野に生かす動物は生も死も己のもの、それを人は自分たちのため奪っていく、その獣の哀しさを見るのが辛かったのです。  
これは決して本の中だけではありませぬ。

実際の世界でもそうです。なぜそんなのかと疑問を持つ人も多いと思います。それは人間が強いからです。「すべての生き物が共通して持っている感情は、愛情、愛、恐怖、」という言葉が本の中に出てきます。

ぼくは最初、意味がわかりませんでした。ですが、だんだんとわかってきました。人と人、人と動物、動物と動物これらの関係で持つ感情は「恐怖」。弱い物が強い物に従う。いわば「弱肉強食」です。ですが、全ての関係がそうなのではないか。それはわかりません。

もし、あなたがたが飼っている動物が、自分自身、あなた自身に恐怖という感情しかもっていなかったらどう思いますか。わからない、想像できないという人が多いかもしれません。わかってしまったら、人とも付き合えない。動物とも付き合えない孤独になってしまいませんか。

動物を飼うことに対する嫌悪。でもなぜ生き物がこの世界にこのように在るのかを知りたいという探求心。この本の主人公だけでなくたくさんの人々がこの探求心を持っていきます。しかし人々は相手かどのようになら思っているか。しりたくないなど自分では気づかずに相手との溝壁、隔りを作っています。

言葉の通じる人間どうしてこのように動物と良い関係をつくり、生き物がなぜこの世界にこのように在るのかを知るには、尚更、難しいことです。  
そこで、人と人と関係を深めていくことに主人公は気づくのです。  
人はそれぞれ違う感情、意見をもっています。その違う感情、意見をどうして

いくのか人間関係を良くする一つの鍵なのです。

人間と動物、双方が良い関係になる、強さでおさえつけるのではなく、感情を伝え合うようにできるにはどうすればいいのかが、それとも、獣とは感情を伝え合えない、良い関係をつくるにはいけないのか。

これは誰もが考えなければならぬ問題です。  
人間以外の生き物でも必ず争いがあるはずで、その中で相手を力でおさえることも必要です。しかし、人間はそれを自分たちのためだけに、力をふるいすぎているのです。

こうしたことを、言葉の通じる者どうしでどうしていくか、通じない者どうしでどうしていくか。

ぼくはこの本を読んで、同じ人、人間が書いているとは思えませんでした。まさに、人間に支配されている獣が思っていることがわかっていくかのようなことを人間側から見て書いているのです。  
この本を読んで改めて、人と動物、人と人の関わり方、生き方について考えさせられました。

書名『獣の奏者』上橋 菜穂子 著

(寸評)

言葉を使う人間が、どのように他者(人や動物)と関わっていけばよいのか



そのほかの最優秀作品についても、来月以降順次紹介していきます。  
※生徒の学年は、コンクールが行われた平成28年度当時のものです。